

## 北海道のスギナモ ～新産地報告～

外山雅寛

筆者が、北海道のスギナモについて初めて報告をしたのは本会会報のNo.45であるが、その後の調査で、本道にこの植物が、比較的多量に産することが判明したので再度の報告をしたい。

### (1) これまでに見ることのできたスギナモの産地

本会会報No.45で報告したスギナモの自生地としては、弁天沼(勇払郡トマコマイ市)・ウトナイ湖北東岸部である。そのうち、弁天沼については、再確認されぬと記したが、その後の調査で、よい群落があることがはっきりとしたし、同様にウトナイ湖においてもすばらしい群落があることがわかってきた。今後さらに調査が進展すれば北海道は、尾瀬に次ぐ豊産地となるかもしれない。

本報告では、新しく筆者によって確認された勇払郡遠浅川を中心とするスギナモの群落につき報告することにする。

### (2) 遠浅川について

遠浅川については、あまり知られていないと思われるので、先ず、この川について紹介しよう。

遠浅川は、勇払原野の一部を流れる川で、左岸は早来町、右岸はトマコマイ市となり、その境界線にある川である。川幅は狭く比較的ゆったりと流れ、ヨシ・コウホネ・マコモ・ガマ・ミズドクサなど河岸のみでなく、所によっては、川の中心部にも水生植物が豊富に生えており、流水速度にも変化が見られ、河岸部に至っては止水域も存在する。特にスギナモについては、すばらしい群落が見られ、生育状態も良好である。

途中安平川と合流し太平洋へとそそいでいるが、かつては、国道234号線からすぐ下流あたりに、かなり大きな遠浅沼があった。面積にして現在の弁天沼の約半分程である。ところが、本沼はトマコマイ東部開発のために排水干拓され、1971年に消失してしまった。

現在は遠浅川兩岸の丘の近くに至るまで、無数に散乱する2枚貝のからによってかつての沼の広さを知ることができるし、沼底が砂質の部分(火山砂)と泥炭質の部分から成っていることがわかる。恐らくは弁天沼と同等の極めて豊かな水生植物相があったものと思われる。

干拓地は、南早来変電所から引かれる高圧線の鉄塔建設のためのみに使われたようで、排水跡地は未利用のまま放棄されている。かつての湿原植物の名残りとして、ミズオトギリ・ヒメシダ・ヤチヤナギ・タチギボウシ・ハスカップ・ナガボノシロワレモコウ・カヤツリグサ科の仲間等が見られるのが現状。タヌキモ科はずい分探し求めたが、ついに見つけることはできなかった。モウセンゴケはただ1体の確認だったが、ここで育つことは無理と判断されたので、証拠標本用として採集した。



図1 スギナモの沈水タイプ(左)と気中タイプ(右)

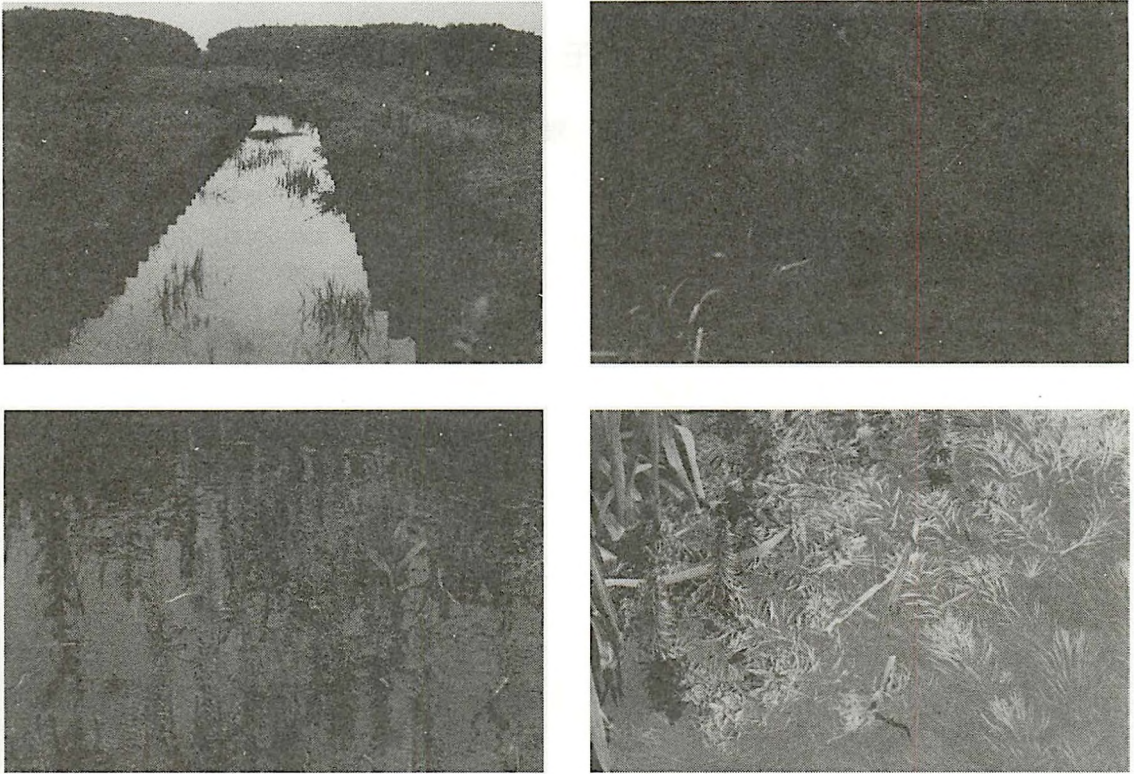


図2 (左上) 遠浅川に直交する排水路。この中に沈水タイプのスギナモが群落をなす。(左下) 止水気中タイプ。遠浅川左岸。(右上) 止水沈水タイプ。遠浅川右岸に直交する排水路。(右下) 流水沈水タイプ。遠浅川左岸。

### (3) 遠浅川を中心とするスギナモの群落

スギナモについては、遠浅川の全域についての調査は行っていないが、極めて生育状態がよいということと様々な生態のものが観察されるという点において、この流域のものは、北海道にとって貴重な存在である。沈水タイプのものは、止水域にも流水域でも観察できるし、時に河岸には気中タイプのものも見られる。流水タイプのものは植物体のずば抜けて極大なものがあり、大なるものは、1 mに達する。底質が泥土の所には大群落が見られる。

最も美しいものは、止水域に見られる沈水タイプのもので、あまりの美しさに歓喜の声を発した。その位置は、国道234号線にかかる小さな橋より下流1.5km程の所、右岸に直角に接する排水路の中である。水は静止しているがアオコ等も無く良好な環境が維持されている。恐らくは大雨の時などに水路の水が遠浅川に流れ込んで、新しい水と入れ代わるためかと推定される。遠浅川への落口

は鋼管となっていて、そこから古い水が排出されるようである。なお、この排水路は最近ついたようで地形図上には示されていない。

ここで見られる止水域のスギナモの沈水タイプのものは、水面下では鮮緑色というよりは、むしろ緑青に見えるから、その鑑賞価値は抜群であり、群落の規模も大きい。遠浅川の近くに多く、排水路を上に向かうにつれて群落は次第に消えていく。土性の微妙な違いに分布が支配されていて、本種が自生できる化学的な環境は調査に値する興味深い内容を含むものと思われる。

#### —おわりに—

スギナモは、北海道でも極めて希種に属する水生植物であると思っていたが、勇払原野をくまなく調査すれば広大な原野故に、まだ相当多数の自生地があるのかも知れないという期待を持つに至っているので、折にふれ、報告する機会をつくりたいと考えている。なお、参考の

ために数枚の写真を添付し、報告としたい。  
標本は、止水域の沈水タイプの材料を採集してから、

証拠品として神戸大学の標本庫に納める予定である。

## 第15回全国集会・大津の報告

1993年7月24日・25日に、第15回全国集会・大津が滋賀県琵琶湖研究所を会場として開催された。数名の欠席はあったものの、当日に新たに受け付けをされた方もあり、参加者総数は87名にもなった。

青木繁（滋賀県立ふるさといきものふれあいの里センター）、芦谷美奈子・草加伸吾（滋賀県立仮称琵琶湖博物館開設準備室）、栗林実（㈱生態システム研究所）、山口龍三（滋賀県教育委員会・びわ湖フローティングスクール）、浜端悦治（滋賀県琵琶湖研究所）が準備を担当した。7月14日には船を、翌15日には車を用いてエクスカージョンの予定地を移動し、コースの最終決定をおこなった。長梅雨の雨にもめげず、良い観察地点を探そうと、水辺に近づきすぎ胸までどっぷり川にはまられた方を出すほど、入念？な下見をおこなったにもかかわらず、時期はずれの台風（4号）の襲来で、予定のコースの変更を余儀なくさせられた。

24日午後1時から、途中休憩をはさみながら、次のような興味深い研究発表がおこなわれた。

1. 小林節子（千葉県水質保全研究所）：印旛沼、手賀沼の水生植物の近況
2. 生嶋功\*（千葉大・理）・前河孝志・森田尚（滋賀県水産試験場）：ヨシ群落内外の水質特性
3. 宮本明宣（千葉県立長生高・生物）：九十九里平野の池沼群における水草の分布と水質
4. 国井秀伸\*（島根大・汽水センター）・Senny Sunanisari（インドネシア科学院陸水研究開発センター）：オオオニバスの葉の成長
5. 井出口佳子\*・下田路子（東和科学株式会社）：山口県下関市のため池の水草
6. 中村俊之\*・角野康郎（神戸大・理・生物）：兵庫県加古川水系におけるクロモの遺伝的多様性
7. 立花吉茂（花園大学）：ウルグワイの水草について
8. 栗林実（㈱生態システム研究所）：琵琶湖沿岸における低湿地性稀少植物の分布状況

9. 芦谷美奈子\*（仮称琵琶湖博物館開設準備室）・滋賀ため池研究会：滋賀県八日市市のため池の水草の現況
10. 青木繁（滋賀県立朽木いきものふれあいの里センター）：滋賀県北部の湿地植物
11. 浜端悦治（琵琶湖研究所）：中国雲南省洱海の水草と琵琶湖

なお当初発表が予定されていた桜井善雄先生は急用で欠席され、桜井善雄・越中直樹・上野直也：「霞ヶ浦におけるヨシ群落の株化・崩壊とその原因（予報）」と題した資料配布のみがおこなわれた。

続いて開催された総会では、事業報告などがおこなわれたのち、賛助会員制度や全国集会の次年度開催地などが討議された。

午後6時30分からは研究所そばのさざなみ荘で、65名の参加者を得て懇親会が催された。宴会に先立ち、琵琶湖研究所の吉良竜夫所長が挨拶をされた。宴席の料理には、水草研究会を意識してのことではないと思われるが、ジュンサイなどもえられており、なかなか好評であったようだ。また大滝先生からは煙草の引き出物があったり、新潟の方達からは、越寒梅などの銘酒の寄贈があり、大いに盛り上がった。

翌日の見学会は当初2隊に分け、一隊は滋賀県のセミナー船を用いて湖上を、一隊は陸上をバスでそれぞれ長浜に向かい、昼食後バスと船とを交代して大津に戻る計画であった。台風一過の7月25日の早朝は風も弱く穏やかな天気かと思われたが、台風が日本海に出た後に突風が吹く可能性が高いというセミナー船の船長の判断により、船の利用は中止となった。見学会の参加者は68名にもなると、予定していたバス1台には乗りきれず、急ぎよ集めた3台の車を加え、大津から、八日市、長浜市、湖北町、余呉町へと北上した。

まず初めに、名神高速道路を利用し八日市市に向かい、3つのため池（新溜（布施溜のとなり）：八日市市布施